

2021年10月4日

報道ご関係各位

一般社団法人緊急事態舞台芸術ネットワーク 設立のご報告

緊急事態舞台芸術ネットワーク

平素は緊急事態舞台芸術ネットワークの活動にご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

このほど当ネットワークは、「一般社団法人 緊急事態舞台芸術ネットワーク」として、新たに活動を開始することとなりました。

緊急事態舞台芸術ネットワークは、昨年5月、「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が拡大する中、社会との親和性を図りながら、舞台芸術の公演を再開していく」ことを主たる目的として発足され、以降、感染拡大防止のための業種別ガイドライン作成、各種支援策に関する政府・自治体との協議・交渉、それら情報周知や支援策活用のための現場サポートなど、多岐に亘る活動を行ってまいりました。今や加盟する舞台芸術関連団体は244に及び、従来に類を見ない、まさに日本舞台芸術界を横断する一大ネットワークへと成長しています。

当法人は、このネットワークの活動をさらに拡充し、力強く推進すべく、設立されるものです。代表理事には、池田篤郎（東宝株式会社 常務執行役員演劇担当）、野田秀樹（NODA・MAP/劇作家・演出家・役者）、吉田智誉樹（劇団四季 代表取締役社長）の3名が、加えて、理事には、日本舞台芸術界を牽引する企業・団体から計20名が就任いたしました。

過日、感染者数減少に伴い、国内の緊急事態宣言およびまん延防止等重点措置が、全面的に解除されました。日本は、いよいよ「ウィズコロナ」社会へ向かう転換点に立ったと考えております。いかなるところのいかなる人々の日々の営みも、ともに回復されていかななくてはならない。その只中で、当法人は、舞台芸術の力が多くのお客様の日に潤いをもたらすと信じ、安心安全に「劇場の灯」を灯し続けることに一意専心してまいります。

報道ご関係の皆様におかれましては、当法人の活動にご支援賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

《当リリースのお問い合わせ先につきましては、下記までお願い申し上げます》

緊急事態舞台芸術ネットワーク事務局 メールアドレス info@jpasn.net

《概要》

- 社名： 一般社団法人 緊急事態舞台芸術ネットワーク
(英文表記 Japan Performing Arts Solidarity Network 略称 JPASN)
- 本社所在地： 東京都港区北青山 3-6-7 青山パラシオタワー11階
- 設立日： 2021年9月16日
- 設立目的： 新型コロナウイルス感染症の拡大をうけ、舞台芸術業界が危機的状況から脱却し、安全な状況で再開され再生していくために、互いに連携し協力し、情報を共有し合うことを目的とし、その目的に資するため、次の事業を行う。
- (1) 舞台芸術に関わる団体、個人への支援
 - (2) 舞台芸術に関わる情報の収集と共有、必要な提言
 - (3) その他、当法人の目的を達成するために必要な事業

役員一覧（五十音順）：

代表理事	池田篤郎	東宝株式会社 常務執行役員演劇担当
	野田秀樹	NODA・MAP 劇作家・演出家・役者
	吉田智誉樹	劇団四季(四季株式会社) 代表取締役社長
理事	安孫子正	公益社団法人日本演劇興行協会会長 株式会社歌舞伎座代表取締役社長
	伊藤達哉	有限会社ゴーチ・ブラザーズ 代表取締役
	井上正弘	有限会社オフィス新音 代表取締役社長
	大島祐夫	株式会社アート・ステージライティング・グループ 代表取締役
	加藤真規	株式会社東急文化村 常務執行役員
	金井勇一郎	金井大道具株式会社 代表取締役社長
	北牧裕幸	株式会社キューブ 代表取締役社長
	北村明子	有限会社シス・カンパニー 代表取締役
	小見太佳子	株式会社アミューズ 執行役員
	佐藤玄	株式会社パルコ エンタテインメント事業部 演劇事業担当 ゼネラルプロデューサー
	鈴木基之	株式会社ホリプロ 代表取締役専務 公演事業部執行役員
	福井健策	骨董通り法律事務所 代表パートナー
	船越直人	松竹株式会社 取締役 演劇本部副本部長
	松田誠	株式会社ネルケプランニング 代表取締役会長
	宮城聰	公益財団法人静岡県舞台芸術センター (SPAC) 芸術総監督
	村田裕子	株式会社梅田芸術劇場 取締役 東京事業部長
	渡辺ミキ	株式会社ワタナベエンターテインメント 代表取締役社長

加盟団体数： 244 (2021年9月末時点)

《代表理事 コメント》

池田篤郎（東宝株式会社 常務執行役員 演劇担当）

この度、緊急事態舞台芸術ネットワークが法人化されましたこと、心より嬉しく、そして皆様のお力添えに深く感謝申し上げます。

昨年の2月26日に発せられた「大規模イベント自粛要請」から既に一年半の時間が過ぎ去り、この間、私たちは本当に多くのものを失いましたが、また一方で大変多くの貴重なものを得ました。

失ったものは、大切な作品群であり、それに費やされた企画者、クリエイター、俳優の熱意、そして目を覆うばかりの莫大な経済的損失、一方で得たものは、舞台再開を果たした時からのお客様の変わらぬ温かい拍手、SNSを通じての声なくとも大きなご声援、そして政府からのJ-LODlive補助金を始めとする様々な経済的支援策です。

こうして得たものの多くは、この緊急事態舞台芸術ネットワークの活動によってもたらされました。ネットワークの目的は、まずは安心安全な公演の再開、そしてそのための現場の支援とガイドラインの作成にあります。

私たちは、世界の中でも極めて珍しく、昨年夏の再開後から一年以上に亘り、客席ではひとつもクラスターを発生させず、様々な開催制限を受け続けてはいるものの決して劇場を全面的にクローズしたことがないという誇るべき実績を更新し続けています。そして、これは、ネットワークが作成したガイドラインを加盟団体全てが誠意をもって守り続け、安全で安心な環境づくりに全力を尽くした成果に他なりません。

「緊急事態舞台芸術ネットワーク」のネーミングには「緊急事態」がその逼迫した重大性を表し、「舞台芸術」全てのライブステージを包含して、参加者の闊達なコミュニケーションが機動性と自性を生み出す「ネットワーク」であるようにとの願いが込められています。

舞台人全てに声掛けをしてくださり、代表理事として団体を率いていらっしゃる野田秀樹さん、そして、政治そして行政と厚い信頼のパイプを繋ぎ、現場の窮状を訴え、支援策の獲得に全力を挙げて取り組んでくださっている福井健策理事、また製作現場、興行現場からは共同代表理事である劇団四季の吉田智誉樹社長がいつも思慮深い分析、判断を示してくださり、その他理事会、事務局の皆さんはじめ、プロジェクトチームそれぞれのご尽力により、ネットワークは自由な意見交換の場を得て、益々その力を強固なものとしています。

まずは「緊急事態」を脱するために、そして、過去に例のない演劇界の大団結の証として、法人となったこの団体が今後益々舞台芸術の復興と、その後の発展に貢献できるものとなるよう、力を合わせて進んで参りたいと存じますので、どうぞ引き続きのご支援を賜りますようお願いを申し上げます。

野田秀樹（NODA・MAP 劇作家・演出家）

当ネットワークの立ち上げは、昨年2月26日の、舞台イベントに対する政府からの名指しでの自粛要請がきっかけです。それは科学的根拠のないもので、加えて当時の世情の同調圧力も加わり、舞台芸術界は、一気に経済的にも窮地に立たされることになりました。そこから立ち直るべく自然

発生的に生まれたのが、この緊急事態舞台芸術ネットワークです。いわゆるタイプの違う団体が集まったことで（つまり、こんなことでもなければ、なかなか出会う機会もなかっただろう）幅広い、懐の深いネットワークが出来上がりました。その為に、多方向から情報が集まりやすく、政府等との協議も多方面からの知恵が結集し、交渉能力も高まりました。結果として、今、内閣府からは「舞台芸術は、不要不急なものではない」と風評被害を払拭していただき、さらに事実として、専門家からも「劇場は、感染リスクが低い」との言質もいただいております。補償なき自粛要請に応えた当業界の経済的な窮地も、政府との交渉で、J-LODlive 補助金を始めとして最低限の支援を得ることも可能となりました。こうした成果はひとえに、今回のコロナ禍において、「横のつながり」がいかに大切であるかを、当ネットワークを通し、実感し自覚した賜物でもあります。

私たちは、本来、コロナ禍が収束次第、解散するというだけで集まったネットワークでした。それゆえ当初、持続化には消極的な姿勢でしたが、この思いもかけない「繋がることの」重要性への自覚と、さらにコロナ禍の長期化も手伝って、ネットワークが持続していくことにポジティブな方向へと変わってまいりました。言ってみれば「潰すには惜しい」という思い、ひいては日本の演劇の未来に向けて引き続き、何らかの力になり得るのではないかと、そういう思いで、この度の「法人化」に踏み切ることになりました。とは言え、このネットワークの初心は、コロナ禍の緊急事態を脱して、「普通の劇場の姿に戻る」そのこと以外の何ものでもありません。邪心も野心もありません。だから「法人化されても」いや「法人化されたからこそ」緩やかなネットワークであること、そして、開かれたネットワークであることを肝に銘じたいと思っております。

吉田智誉樹（劇団四季 代表取締役社長）

コロナ禍は人類史上に残る事件であり、日本の舞台芸術界にとっても災厄でしかありませんが、ただ一つ良かったと言えるのは、この「緊急事態舞台芸術ネットワーク」が結成されたことだと思います。設立理念、活動内容、事業規模などを異にするさまざまな団体が、コロナ禍の脅威に対抗して大同団結し、社会に対する窓口となり、業界全体の方向性を話し合える場を持てたことの意味はとて大きいと考えます。

また、決してお互いを束縛しない組織であるということも、本ネットワークの優れた所だと思います。古典芸術に代表される長い演劇的伝統と、明治維新以来の西欧文化の受容がもたらした新しい形式、異分野のコンテンツとの融合など、様々な特徴を有している現代日本の舞台芸術界が、その自在さと多様性、しなやかさを保持しつつ、今回のように業界全体に対する脅威に対しては、迅速に、的確に団結して戦えるのです。

コロナ禍は長期化の様相を示していますが、本ネットワークのもとに集まった知見も相当の蓄積となりました。また舞台芸術には、これまでも多くの戦禍や疫病の流行を乗り越え、数千年間の時を生き延びて来た歴史があります。「緊急事態舞台芸術ネットワーク」の団結が、必ずや「ウィズコロナ」の時代を乗り越え、日本の舞台芸術界に再び輝かしい日々を取り戻してくれることを信じております。